

第251回 令和8年6月16日(火)

「正義の味方」

私はリアルタイムではありませんが、ウルトラマンや仮面ライダーで育った世代です。そのころのヒーローは「正義の味方」と呼ばれていました。地球を侵略者から守るために怪獣や宇宙人と戦いました。

大人になって考えてみると、ちょっと理不尽さを感じます。なにしろ怪獣が出現したら問答無用でやっつけるわけです。理由も聞かずに滅ぼしてしまいます。家や町を破壊しているのならまだしも、山や海に出現しているときでもすぐに攻撃しているように記憶しています。

そもそも宇宙人が地球に来ると「侵略」という言葉が使われますが、同じSFのストーリーでも地球に住めなくなった人類が別の惑星を探すときには「侵略」という言葉は使いません。ちょっと都合がよすぎる気がしないでもありません。

基本的に国の為政者は「自国の幸福」を最優先します。自国民から見て「正義」であることも、他の国から見れば「侵略」に見えることもあります。実は「正義」というのは「真実」と違って一つだけとは限りません。ところが「正義」を信じている人にとっては唯一無二の理論になってしまうことが多々あります。自分の「正義」のためなら他者が犠牲になることもやむを得ないという理屈が優先されることがあります。

「正義」や「正論」の怖いところは、相反する考え方を「悪」と見なしてしまうところにあります。「正義」の反対は必ずしも「悪」ではありません。別の立場の「正義」であることも珍しくありません。

将来地球人が、太陽が膨張して地球が飲み込まれる前に宇宙船で別の星に移住しようとしたときに、ウルトラマンがやってきて宇宙船をスペシウム光線で全部破壊してしまったら、とても「正義の味方」と呼ぶことはできませんよね。

中東のパレスチナではこれと同じような理屈で紛争が起きています。イスラエルは先の大戦で被害を受けたユダヤ人の国家であり、イスラエルの「正義」によって行動しています。

パレスチナ問題はお互いの「正義」がぶつかっている戦いです。なかなか解決策は見出せません。

それでもガザ地区で多くの子どもたちの命が奪われていることは事実です。子どもの命を奪うことが許される「正義」などこの世界にもないと思います。